

## 大山郁夫研究

——社会的デモクラシーの受容と

民衆的立場への接近——

福井 みどり

—

大山郁夫は、一九一五年以後民本主義を掲げて論壇で活躍を始める一方で、勤務先の早稲田大学において、大学改革の運動を起こし、結果的にいわゆる「早稲田騒動」の一端を担って大学を離れることとなる。一九一七年九月のことであった。大学を辞した大山は、その年の暮、一二月一五日に大阪朝日新聞社に迎えられ、社会部論説班に属した。<sup>①</sup>これは社会部長の長谷川如是閑と編集局長の鳥居素川らから誘いを受けたためであった。<sup>②</sup>そして白虹事件で退社するまでの約一年間、学者から一転して記者としての生活をおくることとなった。

大山は晩年近くなってからこの時期を回顧して、「この一年の論説記者時代は、私の人生を決定したといふことができる」と述べている。大山はいう。

私はその頃、書齋の中では、私の学問の方向がどうしても見出せなかった状態だった。一九一〇年から一四年まで、アメリカ、ドイツ等への留学の間にみたり学んだりしたこと——アメリカン・デモクラシーとかドイツ国法学、オーストリーの民族闘争などから受けた影響が私の中で混沌としていたのである。（中略）私は混沌としてゐる書齋を出て、自分の眼で社会事象の正しい認識に到達したいという気がしきりにしていた。（中略）私は書齋を出て論説記者になり、直接に社会事象にふれる喜びをあふれるように感じていた。<sup>③</sup>

この間には、ロシア革命、米騒動、そして第一次世界大戦の終結等、時代の転換を告げ、人心を揺り動かす要因が重なったこともあって、確かに大山の思想もまた、大きく動きはじめていた。ただし私は、大山の著作を検討した結果、そのような思想的変化の出発点を、寺内内閣成立の時点、すなわちほぼ一九一七年前後と見る。

寺内内閣成立後、大山は、「大勢は次第に政党政治に向って移動しつゝあったが、最近に於てそれが急に行詰りとなつた観がある」、「一種の反動思想が芽を吹いて、短時日の間に比較的急速に社会の一角に地歩を占めたことは事実である」<sup>④</sup>との危機感に覆われていた。それゆゑ大山は、彼の期待を裏切つた政党と、そして政党政治実現の妨害者となつた元老に対して、一連の厳しい批判を展開する。

ことに政党に対しては、「若し政党政派にして国家の利益を自党自派の利益に従属せしむることに依つて世論政治の健全なる発達を阻害することあらば、之を糺弾すべきものたる点に於て超然内閣と択ぶ所がないのである。此見地よりすれば、我國の既存の政党には一も此標準に照して満足に合格して居るものがないと謂ふことができる」<sup>⑤</sup>と述べ

て、政友会・憲政会・国民党の三党が自派の利害に走り、一致して官僚に向かおうとしないことを論難した。また、三党とも選挙権拡張を一項目にあげてはいるものの、それに対する消極的態度も批判の対象であった。なぜならばこ  
こでも、「真の意義に於ける挙国一致は、国民の各個をして国家の運命に対して共同利害を感じせしめ、国家の経営に關  
して共同責任を感じしめることに依つて実現し得べく、而して此目的を貫徹せんと欲せば、教育的事業としては健全  
なる国家觀念の養成に努むべく、實際的事業としては選挙権を出来るだけ広き範圍に普及せしむることを図るべきで  
ある」と考えていたからである。<sup>⑥</sup>にもかかわらず、官僚が選挙権拡張を危険視しているのは、「是れ彼等が国民の誠  
意に信を置かざるが故であ」り、「苟くも国民を信ぜずして挙国一致を説き、民衆の協同を促すは、矛盾に非らざれ  
ば狡猾である」との非難を浴びせた。<sup>⑦</sup>

そうは言いつつも、実は大山自身も、「国民を信ずる」ことには、いまだ一定の留保を伴っていた。それは、一種  
の知性主義に起因するものであった。大山によれば、「社会の理想は、個々人を悉く哲人とする平等界を現出するに  
あ」つたが、いまだそれは実現していないゆえに「内治外交の上に偉大なる功業を遂げ得る指導者」、すなわち「何よ  
りも先づ国民の思想感情に接触を保つ哲人たり、英雄たるもの」を必要とするのである。<sup>⑧</sup>そうして国民に対しては、  
無論政党の側にも原因があるとはいへ、政党の役割に無関心であるなど、立憲政治の基礎的能力に欠けることを慨嘆  
せざるを得ず、もっぱら教育の必要性を力説するのであった。<sup>⑨</sup>

しかしながら、大山の関心は確実に、民衆への信頼ということに向かい始めていた。たとえば、我國の殆ど統て  
の政党の罪惡とも言ふべきは、官僚の擧に倣うて、将来来らんとする時代の主要勢力たるべき国民——殊に潑刺たる  
活氣を有する青年国民に倚賴せぬことである<sup>⑩</sup>とか、あるいは元老に対しても、「彼等は怜悯であり、且つ民衆を信

⑪「しない」との攻撃を浴びせているように。それは一つには、民衆に基礎を置く政治とは対極にある寺内軍閥内閣が出現したことによって、その危機感から逆にかえってその点の重要性の自覚が促されたものと考えられる。

ロシア二月革命がおこったことも、大山の民衆観を変容せしめる要因であった。いまだ情報が限られていたが、そのなかで大山は、自分が目下取り組んでいる大学改革運動の関心にひきつけて、ロシアの大学生ら「智識階級」が革命運動において重要な役割を演じたことに注目し、さらには革命を民意に基づかない官僚政治一般の脆弱さを露呈したものと見てとった。後者について大山は、「如何なる予測が間違つても、今回の革命は、露国の如き特別の事情に於ても、国民に基礎を有せざる官僚政地（マツ）が、その外面の強硬なるに似ず、案外に脆弱なるものである所以を教ふること

⑫に依つて、各国の為政者に反省の好資料を能へただけは、的確なる事実であると謂はねばならぬ」と述べている。このような受けとめ方は当時、政党勢力の伸張を企図するものにとつては一般的であつたようで、原敬もまた、

⑬「露国の革命を見て超然論者も夢を覚さざるべからず」と日記に記した。

大山の寺内内閣攻撃は激しさを増し、批判は、一九一七年六月に、議會に基盤をもたない同内閣が、「挙国一致」による「国論統一」をスローガンに、原敬と立憲国民党の党首犬養毅を抱き込んで設置した臨時外交調査会にも及んだ。それは、国民を埒外に置いた秘密外交政策の産物であり、寺内のいうような真の国論統一機関ではないとし、これに便乗した政党への怒りもあらわにしている。⑭

そしていま一つは、大山自身の告白するところによれば、一九一七年四月の第一三回総選挙の際に金沢で、中立を標榜しつつ実際には憲政会の支援のもとに反政友を叫んで立候補した永井柳太郎の応援演説に向き、そこで民衆に直接接したことによって、民衆への信頼をいま一步確かなものにしたのであつた。大山はすでに大学改革運動の渦中

にあったが、大学の同僚であり同級生でもある永井のために、同僚の武田豊四郎・北吟吉らとともに四月一二日より約一週間金沢に滞在して、演説を行った。<sup>⑮</sup>金沢では、政友会の中橋徳五郎と永井の一騎打ちであったが、大阪商船等の経済的背景をもつ大資本家の中橋に対して、財界との結びつきもなく、ただ普選断行を掲げて颯爽と立候補した永井の勝利を、大山が心から望んだのは当然といえよう。

結果は僅票差で永井が敗れたが、大山は、選挙運動をとおして得たあふれんばかりの感動を、田中純宛の書簡のかわりとして、次のように語っている。

我等は此逐鹿戦に参加して、学窓に於て殆ど思ひも附かない様々の感想を得たが、其内殊に自分を動かしたものは、民衆の愛すべく敬すべきものであることである。我等は今後益す熱烈に民衆のために戦ひ、民衆のために訴へねばならぬとの覚悟を固めたと同時に、我等の従来の努力の必ずしも徒爾でなかつたことを喜び、且つ又将来に於て勝利の栄光の必ず我等民衆の友たる人々の手に帰すべき確信を得たことを慶して居る。<sup>⑯</sup>

そして大山は、永井の主張に共鳴した敬愛すべき民衆が、選挙権を与えられていないことの不合理的に憤らざるをえなかった。<sup>⑰</sup>

確かに選挙運動の際には、「永井の雄弁に群衆は全く陶醉し、ほとんどみな完全に魅惑されてしまった。帰ろうとする永井の人力者を取巻いて、「万歳、永井万歳」を叫び、憑かれたもののように列をなして源円旅館にまでつづき、誰も、しばらくは離れようとしなかつた」と伝えられるように、永井を支持する民衆の盛り上がりが見られたことは事実であろう。しかしながら、これまで民衆の政治的能力への不信を表明してきた大山が、一挙にそれを払拭するには、あまりにささいな経験であり、民衆に対するリアルな認識を欠いたまま、自分のとらえた民衆の一面面からある

べき民衆像を作り上げてしまっているとの感を拭えない。また選挙運動の際にも見られた厳しい言論弾圧に対する怒が、いっそう民衆への共感を増大させる要因ともなっていたと考えられる。

同じころ大山は、労働者に対しても、「国民教育制度が彼等にも多少の文字の智識を与へ日刊新聞紙が彼等の薄汚きポケットに忍ぶ様になつた今日に於て、彼等の前途の發展を予測するに決して早計であるとは言へまい」<sup>19</sup>との希望に満ちた観測を明らかにしている。ただしここでもまだ民衆は、立憲主義の「監督者」であつて、主体的な担い手ではなかつた。

このような民衆に対する共感をいっそう加速的に推し進めたのが、デモクラシーの「世界の大勢」であつた。アメリカが、一九一七年四月に第一次世界大戦に参戦したところから、デモクラシーの象徴として浮上してくる。大山は、ウイルソンが唱える「民族主義」と「デモクラシー」こそが「現代世界の時代精神」の反映であるとして、これに順応すべきことを説いた。もちろん「デモクラシー」については、日本における民衆の台頭という現実の状況に対して打ち出されてきた、かねてからの大山の主張であり、また、前者の「民族主義」についても、以下に見るように、従来の大山の見解に悖るものではなかつた。しかしながら、日露戦争後に獲得して以来の、日本も国際社会の一員であるとの自負ゆえに、日本は、欧米「世界の大勢」からとり残されてはならないとの意識を生み、より敏感にそれに反応することとなつたと考えられる。

この点は、吉野作造らデモクラットに共通していた。吉野もまた、「日本は最近漸やく完全に世界の一国となつたといつて差支ない。而して此事の結果我々の是非考えねばならぬ事は、今や日本は世界の大勢に孤立して進むことは到底許されないといふ事である。（中略）世界の進歩が日本の進歩を促すと共に、日本の開発が又同時に世界の開発

であり、且つ世界の開発を促すものでなければならぬ」と述べて、できるなら日本がイニシアティブをとりつつ「世界の大勢」と一体化していく必要を訴えた。

そのような「世界の大勢」、換言すればアメリカン・デモクラシーの影響を受けつつあるなかで書かれた論文が、「デモクラシーの政治哲学的意義」である。この時期の大山の作品は、留学から帰ってまもないころに比べて、どちらかというと時評的なものに流れがちであったが、これはそのなかで、もっとも学術的な論文であり、一九一七年七月から十一月にかけて、『大学評論』に三回にわたって連載されたものである。

この論文はまず、デモクラシーの歴史的淵源に溯ることからはじまる。それは、デモクラシーこそが「世界の大勢」であり、日本もデモクラシーを実現しなければならないという確信と、にもかかわらず現在の日本には、それと背馳する政治が実在しているいらだちのもとで、今一度、この作業をとおしてデモクラシーの歴史的正統性を確認しようとの意図があったためではなからうか。

大山は、古代ギリシャの時代から説きおこす。そこではソフィストが、「在来の伝統、因襲に懷疑を投げ、若くは反抗を示す」ことによって「希臘のデモクラシーに理論的根拠を与へたもの」として評価されるが、反面「真理と言ふものは、個人が真理と思ふ所のものを離れて存在するものではないと言ふが如き極端論に走つた」との限界の指摘も免れていない。大山によれば、「アリストテレスに及んで、始めて個人主義的立場以外に、人間の政治心理的及び国家道義的立場より、デモクラシーを是認する言説を見るに至つたのである」<sup>②</sup>。以下に見るように、個人主義の徹底よりも個々人の結合を維持するために倫理性を付与することこそがデモクラシーの課題であると考えている目下の大山の関心から、この点が強調されることとなったのである。

近代においてもデモクラシーの發生過程は、「希臘のデモクラシー」が「伝統」「因襲」を打破することによって生まれたのと同様であるという。<sup>②③</sup>すなわち「近代のデモクラシー」は、宗教改革と啓蒙運動によって専制主義が打破された結果生まれたもので、それゆえそれは「個人格の独立の表象として、各個人をして、少くとも国家意思の構成に参与するの權利を与ふる事を要求して居る点」に最大の特徴があるという。<sup>②④</sup>しかしながら、「近代の意味に於ける自由なるものは、国家を離れての自由ではなくして、国家内に於ける自由」でなければならず、<sup>②⑤</sup>そのためにはかつてロツクが強調した「ジヴィル・リバチー、即ち個人の生命、自由、財産上の權利の神聖」<sup>②⑥</sup>よりも、「ポリチカル・リバチー」すなわち参政權が重要視される。大山は以下のように述べている。

（ママ）ジヴィル・リバチーは、近代のデモクラシーの根本觀念の総てではない。此外に尚ほ之に伍して、ポリテイカル、リバチーがあつて、然も此のポリテイカル、リバチーこそは最近世に於ては、ジヴィル、リハチーを圧してずん／＼進歩發達し、尚ほ今後も益々その深さ及び広さに於て増大する形勢を示して居るものであることを忘れてはならぬ。（中略）此ポリテイカル、リバチーの根本主義は、各個人は、政治上に於ても独立の人格と親るべきものであつて、従つて、国家生活に於ては、全然治者の傀儡となつて、受動的に其支配統治の目的物たる分に甘んずべきものでなく、寧ろ能動的に政治の運用に参与する權利を賦与せらるべきものであると言ふ事である。<sup>②⑦</sup>

ここに明らかなように大山は、個の自立の重要性をまったく見落としていたわけではなく、その承認の上に政治的自由が獲得されなければならないことは十分に認識していた。ただしそれは、あくまで国家への能動的な参与を可能にするためのもので、国家からの自由という観点は弱かった。

市民的自由と政治的自由の関係についても、「シヴィル・リバチーとポリチカル・リバチーとは、必ずしも常に相両併進することを得るものでなく、寧ろポリチカル・リバチーの増進する所に於て、シヴィル・リバチーの減退する傾向あるを認めるのである」<sup>②③</sup>と述べており、この点は先行研究も指摘するように、政治的自由と市民的自由が相い矛盾するものとしかとらえられなかったところに、大山の、そして吉野作造ら大正デモクラットの思想的弱点があったといわねばならない。また大山が、「最近のデモクラシーを徹底的に理解せんと欲すれば、人間といふ語を、単に個々の人若くは個々の人々の集合を指すものと見るのみに止まらずして、単一体としての民衆即ち組織せられたる人民を指すものと見なければならぬ」<sup>②④</sup>と述べるとき、大山の目は常に、個人よりも民衆という集団に注がれていることが改めて確認されよう。

大山ら大正デモクラットは、大国ナショナリズムに深くとらわれ、さらに民衆の台頭への対処という目前の課題の前に、国家からの自由、個人の解放という問題を二次的なレベルに追いやってしまったのであった。そうして国民の参加によってなる国家という組織体の倫理的結合がめざされる。しかしながらそれは、天皇制のもつて個の自立、個人の権利・自由の拡大が阻まれてきた当時の日本の状況から見て、きわめて重要な課題であつたはずである。

デモクラシーの形成を古代ギリシャに遡って論じ、「シヴィル・リバチー」と「ポリテイカル・リバチー」の関係を考察し、次いで「人民の抑制(Popular Control)」に言及した大山は、「デモクラシーと指導者」の関係を論じている。すでに見たようにこの段階ではまだ、「世がデモクラチツクになるに従つて、指導者の地位は益々顕著になるものである」<sup>②⑤</sup>と述べており、以前とほとんど変化はない。すなわちここではやはり「指導者」と「被指導者」たる民衆が厳然と分けられており、大山の民衆に対する敬愛は、いまだ民衆を政治の「監督者」から主体的担い手に押し

上げるまでにはいたっていなかった。

最後に大山は、「デモクラシーと民族主義の關係」について述べている。<sup>⑫</sup>すなわち「民族主義とデモクラシーの併行的進歩」こそが「現代世界の政治的趨勢」<sup>⑬</sup>であり、デモクラシーの当該段階の到達点ということになるが、大山によれば、両者の關係は次のように説明される。

民族主義は民族共同の文化、共同の伝統、共同の歴史の上に根拠を有しているものである。而して民族国家主義は這般の歴史的産物たる共同文化団体が、外来の征服者の羈絆を受くることなしに主權的統治団体たる地位を維持せんとする……若くは獲得せんとする要求である。外来の征服者の羈絆に反抗する意氣を有するものは、同時に内部の特殊階級に依つて課せらるゝ圧制に堪ふことの出来ないものである。当該共同文化団体内部の本然の要求の發言を妨げ<sup>(マ)</sup>。その精神的統一を破る点に於ては、外来の敵と内在の敵との間に程度の差こそあれ、その傾向上に於てはその軌を一にするものである。民族主義に共同の文化……共同の伝統の保護のために、この両者に向つて均しく挑戰するものである。故に民族主義は究極に於て、デモクラシーに終らずんば已まぬものである。<sup>⑭</sup>

すなわち民族的独立と一国内における民衆の抑圧からの解放は、「民族共同の文化」を守るといふ本質において一致するものであり、それがデモクラシーであるというわけである。ここで注目すべきは、デモクラシーを、かつてのようにステイックに民衆統治の手段として位置づけるのではなく、抵抗のシンボルとして見なしている点である。実際に大山が、論壇において寺内内閣に激しく立ち向かうなかで、しだいに培われてきたものといえよう。あるいは、早稲田大学改革運動における大学当局との闘いの経験もそこに何らかの影響を及ぼしているのではなからうか。

ところが、大山に大きな影響を与えたウィルソンの民族自決主義が、実はアメリカの利益と結びついたものでしか

なかったと同様に、大山のそれも、やはり日本の国益を離れてはありえなかった。「民族国家主義」は、一九一六年の段階で、朝鮮・台湾の異民族統治に矛盾するとして否定し去った概念のほずであった。それがここでは、朝鮮・台湾に対する認識を以下のように改めることによって、「文化国家主義」とほぼ同義のものとして受け入れられることを可能にしたのであった。大山は次のようにいう。

今日に於ては尚ほ未だ大和民族と民族的に合一する暇を有せざる台湾や朝鮮のコンパトリオッツと雖も、タイムの廻転するまに／＼、遂には我等と共に共同文化を仰ぎ、共同伝統を謳歌する同一民族を形成するに至るべき筈のものである。少くとも我等は此民族的融合の時期を一日も早く招来せねばならぬ。<sup>⑤</sup>

朝鮮・台湾を日本が領有することは自明の前提と考えられており、「外来の征服者の羈絆を受くることなしに主権的統治団体たる地位を維持せんとする」要求の正当性を、朝鮮・台湾の人々には認めていない。なぜならば彼らは、「民族的に合一」するべきだからである。朝鮮・台湾が異民族たることを前提とした「文化国家主義」からの「民族国家主義」への修正は、民族主義が世界的趨勢となっている状況下において、朝鮮・台湾との「民族的融合」を謳うことにより、それらの民族的自立を阻む役割を果たしたのである。大山は、この論文の冒頭でヘーゲルを援用しながら、「東洋諸民族」は「西洋の諸民族」に比べて「宿命的傾向」をもっており、「服従者」には適しても「改革者」には適さず、デモクラシーの担い手とはなりえなかったとの見解を明らかにしており、デモクラシーという点においてアジアを劣等視していたことは否めない。むしろその場合日本は、西洋の側として認識されていたのであり、このような見解が、朝鮮・台湾の独立承認の目を曇らせていたのである。

## 二

他方、大山の「国家的結合」の構想に変化が現れるのも、ほぼ一九一七年ごろからであった。

大山によれば「共同利害観念は、人間の戦闘性より発する個人主義的傾向に逆行し、社交性の衝動に依つて優勝劣敗の生物的法則を制限し、弱者保護若くは不平等の平等化と云ふが如き倫理關係の完成を要求し、社会上、政治上、及び産業上のデモクラシーの実現の方向に歩を進めて居る」ものであった。<sup>③⑦</sup>そしてここでは、人類の「心靈的必要」に発する「不合理の要素」であるところの「社交性」すなわち「倫理」と、「生物的必要」にもとづく「合理的要素」であるところの「闘争性」すなわち「力」とに峻別される。そうして後者こそが「共同利害観念」の振作に必要なものとして、その重要性が強調される。<sup>③⑧</sup>ここに、個人主義と競争原理を軸とする資本主義の論理に立ち向かう萌芽が見られる。

大山の明確な変化は、以前は主として精神的結合のみを軸としたものであったのに対して、新たに社会政策的要素に注目しはじめるようになったことである。すなわち「精神的共同利害観念」に加えて、「国家の経済的基礎を以てその出発点」とする「物質的共同利害観念」の必要を説くのである。政治的デモクラシーのみならず、「産業上のデモクラシー」をも主張するようになったことは、社会を自由競争のまま放任して、精神的結合のみを呼号するのは、もはや国家の「共同利害観念」の維持は不可能との認識にいたったことを意味している。

実際に社会は、そう感じざるをえない状況を現出しつつあった。第一次世界大戦下の未曾有の好況によって「成

金」が続出する一方、労働者の生活は、賃金の上昇を上回る物価の高騰により、かえって悪化していた。

このような「貧富の懸隔」の拡大という矛盾を目の前にして、その解決策を提示するべく、河上肇が「貧乏物語」を『大阪朝日新聞』に連載（一九一六年九月一日～二月二六日）したことはよく知られている。そこで河上が挙げた「貧乏退治の根本策」の中心は、「世の富豪に訴えて、いくぶんなりともその自制を請わん」とすることであり、「社会組織の改造よりも人心の改造がいっそう根本の仕事である」との立場に立つものであった。

大山もまた、河上に触発された面もあったであろう、それにやや遅れて、「少数の個人が愈々富み榮えて行く間に、国民の大多数が依然窮乏の情態に在つて、而も生活費の飛躍的昂進のために呻吟する奇現象が生ずるのである」と述べている。そうして大山も河上と同様に、その原因を「功利的打算」ととらわれた「近來所在に崛起する大小の成金連」の側に求めた。<sup>④③</sup>

さらに日本資本主義の飛躍的發展に伴い労働者数が増大したことも加わって、一九一七年には争議件数が急増し、その規模も大きくなっていった。このような労働争議の高揚に対して、「共同利害観念」の保持を理想とする大山が、「資本労働の衝突程忌むべきものはな<sup>④④</sup>」いとの危機感をもって苦々しく受けとめたのは当然のことといえよう。しかしながら大山は、望むべき「両者の調和」は「係争者の一方のみを抑圧することに依つて実現せらるべき筈のものでな<sup>④⑤</sup>」いとし、とりわけ「労働者をして旧來の伝習を守らしめんと欲せば、資本家をして亦之を守らしめよ。併し乍ら資本家が既に賃銀制度を採用して、労働に対する報酬を需給の原則に依つて定めて居る時に當つて、独り労働者をして主公に対する従者の礼を尽くして資本家を待たしむることは、片手落の仕打であり、依姑の沙汰である<sup>④⑥</sup>」と述べて、労働者に対する一方的抑圧に驚鐘を鳴らした。実際に、時の警保局長永田秀次郎が「資本家の代弁者」として争

議を敵視しているとして、「無告の労働者が生活の圧迫と資本家の無法なる誅求とに堪へ兼ねて、最後の手段として行う同盟罷業をも永田氏は罪悪視せんとするのであらうか」<sup>④</sup>との抗議も行っている。

大山にとって「公共的精神は、決して功利的打算に依つて助長することを得るものでなく、創造の歓喜より迸り出づる道徳力であらねばなら」<sup>⑤</sup>なかつた。つまり大山は、利益本位の合理主義的行動や権力的強制を超えて、あくまで個々人の「善意」と犠牲から「公共的精神」が発揚されることを求めたのである。それゆえにかえつてある種の道徳的な押しつけがましさを伴っており、この点は再度、同時代人の大山批判との関わりで言及したい。かつまた、これまでも見てきたように、強者の論理を抑制しての弱者への同情の必要の強調は、人權の擁護それ自体が目的ではなく、「国家的結合」維持のためという国家主義と結合するものではあつたが、そこには、大山の人間のやさしさがあふれており、しかも大山が同情を及ぼしうる「弱者」の対象が、しだいに労働者階級にまで下降しつつあつたことが見てとれよう。政治・社会問題の解決を制度の変革に委ねず、「個人の精神」<sup>⑥</sup>なり「道徳」に求める「理想主義的」傾向は、しばしば人道主義と評されるように、この時期の河上や吉野をはじめとする大正デモクラットに共有されており、白樺派知識人にも通じる時代的特徴であつた。

また大山は、ロシア二月革命、次いでドイツで起こつた政変の原因は、直截には「物資の欠乏」にあると見るようになり、<sup>⑦</sup>これも社会政策の急務を感じとる要因になつていた。

そうした内外から押し寄せる危機感に促されながら、大山は寺内内閣の「社会政策」を皮相的、かつ専制的であると批判するが、彼とて別段それに代わる具体的な政策を提示しているわけではない。社会政策の先進国イギリスを範にとり、デモクラシーの発達による選挙権の普及こそが、「不平等の平等化」を真に満たすことのできる社会政策立

法を生み、「共同利害観念」を強化しうるものと認識するにとどまっている。<sup>50</sup>つまり大山は、しだいに先鋭化しはじめた階級対立も、立憲主義の枠のなかでデモクラシーを増進させることによって解決しようと考えていた。そうして社会政策は、あくまで「公共的精神」を維持するための補完的役割を担うものであった。

このように、デモクラシーの陣頭に立つて時局批判を展開し、『中央公論』・『新小説』などの総合雑誌に頻繁に登場する大山は、吉野作造と並ぶ民本主義のオピニオン・リーダーとしての地位を不動のものにしていった。『大学評論』一九一八年一月号が、「学会人物月旦」の第一回として「政治学者としての吉野博士と大山氏」の特集を組んだことも、それを象徴していよう。そこに登場する論者のなかに、二人が当時代を代表する新進の二大政治学者かつ評論家であることに疑いを容れる者はなく、またそのうちの何人かの論者は、両者の違いを「吉野君が實際政治を論ずるに大山君は政治哲学むいたものをつかまへる」<sup>51</sup>ことに見いだしている点で一致していた。

そのなかでも室伏高信は、「デモクラットといふ点から見ても、そのいふところが、より多く深きものに根ざしてゐるといふ点から見ても、大山郁夫君は吉野博士よりは一段上ではないかと私は考へる」<sup>52</sup>と述べて、大山に高い評価を与えた。室伏はこれ以外にも、「現代の政論家と大山郁夫（現代新人評論）」（『新小説』一九一八年一月）という評論を書いており、そこで大山を次のように絶賛している。「私が大山君に関心してゐる第一のものは、彼れがその政治論を哲学のうへに立脚せしめんとしてゐることである。彼れは常に政治哲学者の態度をもつて政治を論じつゝある。彼れには政治哲学があつて、そうして後に政治論があるのである。だから論文を読みつゝある時に、世間の主をして、何処ともなく、吉野博士や佐々木（惣一——引用者）博士なぞに比べると、一種の深みがあるような感じを抱かしめる」<sup>53</sup>と。室伏は、今日の批判を待つまでもなく、すでに、「デモクラシーとインペリアリズムとは、果して両

立する觀念であらうか」<sup>⑤4</sup>との疑問を投げかけて、「内に民本主義、外に帝國主義」の矛盾をつき、さらに前述したような、「共同利害觀念」と「個人主義」の關係や、「社交性」の意味等々についても疑問を差し挟んではいるが、「熱烈なる理想主義者」であり「非個人主義者」を自称する彼は、大山が「道德關係」の上に國家を成り立たせようとしている点を高く評価したのであった。

また北吟吉が、大山が吉野に比べて「支那問題の論及に就ては余り興味を持たない」点を指摘した上で、「日本及び支那の如きは直ちに西洋流の適用困難なる事情があるから、唯に西洋流の政治論の輸入者又は紹介者たるに止まらず、東洋方面の思想及び伝統をも充分研究して貰いたい」<sup>⑤5</sup>との注文をつけたのも、西洋的価値基準と帝國主義ナシヨナリズムゆえに、いまだ中国や朝鮮・台灣の民衆は、大山の「弱者」の範疇の外に置かれていた思想的弱点を見事にとらえていた。

室伏によって肯定的に評価された大山の道德的國家觀に痛烈な批判を投じたのは、社会主義者の山川均であり、大杉栄であった。

大杉は、彼独特の皮肉に満ちた表現で、大山の論文「現代公共生活の諸相」（前掲）を採り上げて批判を展開する。大杉の批判はまず、「根本的に言えば、社会組織の根底が公共的になっているか否かによって、その社会の公共生活の厚薄が決定される」はずであるにもかかわらず、その点を棚上げして、ひたすら「大我の前に小我を棄つる」犠牲的精神に期待する「理想主義」の虚偽性を突いたのであった。同時に、「大山氏が主として挙げた公共生活の諸相には、その議論の最初に事々しく説いた社会心理学的の公衆は少しも与かっていない。たとえば同一新聞紙上に載せらるる種々の記事が持つ特殊の読者を指す公衆なぞは、まったく与かっていない。またかくのごとき公衆の間には、大

我の我に小我を没するなどといういわゆる公共的精神の必要はない」とも述べて、大山がけっして眞の「公衆」の姿をとらえてはいないことを指摘した。<sup>②</sup>確かに、自己の利益追求に走ることをあえて拒否し、「公共」のために犠牲的精神を発揮するのが本来の民衆の姿でありえようはずはなく、その点で大山は「公衆」の本性をとらえ損なっており、大杉よりもはるかにリアリズムに欠けているといわねばならない。

もう一方の山川の方は、その著書『社会主義の立場から——民本主義の煩悶——』（一九一九年）が、その副題のとおり、民本主義批判を意図したものであることはよく知られているが、そのかなりの部分は大山批判に費やされている。<sup>③</sup>これもまた、大山がそれほどに当時の論壇で影響力を持ちえていたことの証左でもあらう。

山川の批判は、大きく二つに及んでいる。一つは、吉野の「哲人政治」と同様、大山が「世がデモクラチックになるに従つて、指導者の地位は益々顕著になるものである」（前引）と述べた点であり、山川は吉野と大山の両者を同列に批判の俎上に上せた。そうして、「民本主義の政治とは、民衆による民衆の政治であるとしたならば、衆愚による衆愚の政治であるとしたならば、そして、もはや民衆の実生活の要求以外から来たる——言葉をかえていえば哲人の「思想」から来たる——政策の実行を意味するものでないとしたならば、「世がデモクラチックになるに従つて」政治の実質は支配の技術や統率の技術ではなくって、国民全体の共同事務たるの性質がますます顕著になる」はずであり、それに反して「指導」と「支配」と「統率」との天才の最も顕著に現われるときは、民衆をしてその生活の必要と離れた方向に、強いて突進せしめようとする場合であることを忘れてはならぬ」との警告を発したのである。<sup>④</sup>つまり山川は、大山が「民衆による民衆の政治」をいいながら「指導者」の必要を主張していることの矛盾を、「民衆の実生活」の視点から突いたといえる。

いま一つは、室伏が評価し、大杉が批判を投じたところの、「政治哲学」についてであった。大杉が、具体の「公共的利害観念」に絞って批判したのに対して、山川は、主として「デモクラシーの政治哲学的意義」を採り上げて、そもそも「政治哲学」なるものの基礎の上にデモクラシーを打ち立てることが、果して民衆を抑圧することになりはしないかとの問題を投げかけた。まず山川は、室伏と大山の「この二人《哲学者には、まず民衆の生活があつて、そうして後に政治論があるかわりに、まず政治哲学があつて、そうした後にその哲学的政治論がある》<sup>⑤</sup>と述べて、大山の「政治哲学」が、民衆の生活実態とは遊離したところで観念的かつ演繹的に導き出されてきたものであることを指摘する。そうしてさらに次のようにいう。

一つの社会を組織する人民全体の意志の一致、もしくは或る条件の下における多数の意志の一致をさして、「社会意志」と名づけることは必ずしも無用のことではない。けれども人間はしばしば自己の手の業を礼拝することく、また脳髓の産物たる観念を礼拝する。社会意志はわれわれの観念であつて、現に客観的に存在するもののはただ個々の意志にほかならぬ。個々の意志を離れて、個々の意志から独立して、社会意志なる独立の意志の存在しないことは、個々の現象を離れて、個々の現象から独立して、宇宙なる独立の存在物が無いのと同じである。宇宙が個々の現象から離れて独立の存在を僭したときに、それは全能の神となるごとく、社会意志が個々の意志から遊離して独立絶対の権力を僭したとき、それは全能の神カイゼルの意志となり、《ツァーの意志となり、もしくは《ユンケルの意志とな《り、軍閥の意志とな《る。<sup>⑥</sup>

すなわち、そのようにしてでき上がった「社会意志」なるもの——大山が力説する「公共的利害観念」もその一つにちがいない——は、しばしばその社会を構成する人々に「強制と服従」を求める権力の意志になりかわるといふ。

また山川は、「言論の自由については、大山氏は故人たる山路愛山氏や浮田和民氏ほどの要求もない」と、市民的自由を軽視したことにについても評価は厳しかった。そして、「大山氏は、少なくとも民衆に石を与える人ではない。けれども大山氏の『政治哲学』は、多くとも民衆にパン屑以上のものを与えるものではない」と評した。<sup>63</sup>

このような多大なエネルギーを投入しての山川の批判について、のちに荒畑寒村は、「大山郁夫君の民主々義論は、完膚なきまでにその超階級的、協調主義的、改良政策的性質を剔抉駁撃せられた」と述べている。<sup>64</sup> 荒畑もまた、山川と同じ「社会主義の立場」に立っていたから山川に好意的になった面はあるが、ここで山川、そして大杉が指摘した問題は当を得たものであり、やがて大山自身に、克服せねばならない課題としてのしかかってくるのである。

### 三

一九一八年の初めごろから大山の思想は、一段と民衆を意識して展開される。一つには、大山自身が述べていたように、「書齋を出て」「直接に社会事象にふれ」たことによるものと思われるが、ロシアでは前年に十月革命がおこり、また一八年早々には、ウイルソンが十四カ条を発表して、「世界の大勢」がいつそうデモクラシーへと前進していったことが大きな影響を与えていよう。この時期の大山の論文につけられた「世界に於ける政治の民衆化傾向及び其特徴的諸現象」(前掲)、「現政局の行詰まりと混沌状態とを救済すべき民本主義の使命」・『大学評論』一九一八年一月)、「転換期に瀕せる民衆政治——英独二国に於ける政治的傾向に関する考察——」(『新小説』一九一八年二月)といった題名からも、日本では官僚政治の厚い壁が立ちはだかっているにもかかわらず、世界的な民衆の時代の到来

の氣運を実感しはじめたことによつて、希望を抱き、デモクラシー實現への決意を漲らせている心情がうかがわれる。

大山は、「憲政に依つて實現せんとする目的」と称して次のようにいう。

それは民族国家の真正の要求たる国家の統治關係の倫理化でなければならぬ。單に我國の統治關係のみならず、現代世界の各国の統治關係は、その複雑なる外殻を擺脫して、その核心を剔抉する時は、畢竟するに優勝群（若しくは征服階級）が劣弱群（若しくは被征服階級）の上に課したる抑圧關係の上に基礎を置いて居るものである。而かも不祥なる血の洗札若しくは国内的革命に依るに非らずして、國民的自覺より來れる社会的、政治的機会均等主義の實現に依つて、斯の如き統治關係の上に改造を加へ、その抑圧關係（即ち力の關係）を倫理關係に引き直はすことが、立憲政治の終極目的であらねばならぬ。<sup>⑤</sup>

以前からの「國民的共同利害觀念」創出という主張の延長線上に、自由競争の結果生じた「優」「劣」の關係に「改造」を加えるという構想が打ち出されており、これはすでに、のちの大山の「社会改造」論の原型となっている。ただしいうまでもなく、この「改造」は、資本主義的支配關係を根源的に否定するものではなかつた。<sup>⑥</sup>

大山に、より大きな影響を与えたのは、ロシア革命よりもアメリカン・デモクラシーであつた。それゆゑ同年一月、連合軍の勝利により第一次世界大戰が終結したことは、デモクラシーが国際社会の普遍的原理となりつつあることに対する確信を強める役割を果した。大山は、「世界が今日に於て既に到達して居る國際的社會の現勢は、その国内に於てアンデモクラチックな政治の行はるる國家を仲間入りさせることを肯じないであらう」と述べて、國際社会のデモクラシー化の一定の達成を認めると同時に、その一員である日本もまた、民本化を推進すべきことを主張す

る。<sup>⑥7</sup>さらにウイルソンらの提唱によって国際連盟さえ具体的日程に上りつつある今日、ひたすら「国民思想の均一化」を固守し、言論思想の自由に圧迫を加えようとする「官僚系思想家」に対しては、「固陋なる鎖国主義思想」との非難を浴びせた。<sup>⑥8</sup>

ここにも明らかなように、「世界の大勢」に取り残されては「一等国」足りえないとの意識が、一面においてデモクラシー推進への意欲を掻き立てているにはちがいないが、しかし、日本の民本化の必要は単に外部の圧迫によってのみもたらされたものではけつてなく、「要するに我國民の意識せると否とを問はず、その内部生活上の衝動より來れる必要——即ち自主的必要」であることを力説する。<sup>⑥9</sup>後述するように大山は、日本もまたけつて「世界の大勢」の例外ではないことを、民衆の動向のなからしだいに実感しつゝあつたのである。

他方、ロシア革命に対しては、あくまでアメリカン・デモクラシーに全幅の期待をかける立場を堅持した。なぜならば、「資本主義の弊害は、法制上の方面に於てはデモクラシーの政治組織を実現すること、及び聡明に考量せられたる社会政策的立法を制定することに依り、又道德上の方面に於ては社会的奉仕の觀念を鼓吹する等のことに依つて之を矯正する事の方が、資本主義の産業その物を破壊して、却て角を矯めて牛を殺す結果を見るよりは、余程有効であり、且つ氣の利いたものであるべき筈」であると考えたからである。<sup>⑦0</sup>当時の限られた知識のなかで大山は、「過激派」のプログラムは分配問題のみを視野に入れ、生産問題を閑却しているといった批判も行っているが、<sup>⑦1</sup>「民族の精神的團結は、資本対労働闘争などの表面的風波の基底を貫通して居る力強き流れである」と考えている大山にとつて、とりわけ是認しがたかつたのは、資本と労働の対立を自明の前提とすることであつた。大山にとってそれは、「一般の人間の本性の純真に対する侮辱」なのであつた。<sup>⑦2</sup>

このような認識は、吉野作造のとった立場と共通するものをもっている。吉野もまた、「若し従来の資本家が如何に貪欲であつたとは云へ、彼等も我々と同じ人類である。彼等と我等との間には何処かに血脈相通する者があつて、説き且つ訓ふれば何時かは解る時があるだらうといふ精神主義の立場を持する者に取つては何うしても相手方の撲滅といふ過激手段には出で得ない」と述べ、それよりも「政治的民本主義の徹底」に期待をつなぐべきことを主張した。<sup>⑦④</sup> 大山・吉野ともども、まだマルクス主義を十分理解しておらず、その誤解によるところも少なくなかつたが、「人間の本性」に限りない信頼をおく「理想主義」「精神主義」の立場からは受け入れがたいものと映つたのである。

また大山は、「過激派」は「物質本位」であつて、「豹には竟にその全身の斑点を消すことが出来ないと同じく、過激派の革命の幻術も、全国人口の七八割を占めて居る無学の農民を瞬く間に賢明にすることも出来なければ、彼等の「暴力の福音」も、一朝にして全国の階級的差別の痕跡を掃蕩し去ることも出来ないであらう」<sup>⑦⑤</sup>とも述べている。ここにも「無学」であれば政治の担い手とはなりえないとの「哲人主義」の立場が貫かれている。

しかしながらやがて大山は、革命政府が旧ロシアの侵略主義を破棄し、公開外交主義、民族自決主義、無賠償無併合主義を提唱したことについては、「将来の国際協同主義の基調たり準備手段」であると冷静に評価し、政体の如何を問わず民衆に立脚する政治には、「人道的情調の閃めき」があると認めるようになる。<sup>⑦⑥</sup> 前述のごとき第一次世界大戦後のデモクラシーの潮流のなかで、大山は民衆の立場にあるか否かを政治形態の最も重要な判断の基準にすえていく。革命政府の場合も、官僚専制を打破し、「政治の民衆化」を推進した点において、「世界の大勢」との共通性を見てとつたのである。

大山はまた、革命政府の将来の見通しについても、それほど大きな誤りは犯していない。少なくとも当面は、「過激派」すなわちボルシェヴィキが勢力を維持するとの判断のもとに、アメリカの革命政府に対する対応を柔軟であるとして高く評価した。<sup>⑦</sup>

したがって大山は、シベリア出兵に対しても絶対反対論ではなかった。アメリカに伍してシベリアに経済的進出を行うことをも奨励していた。しかし、陸軍や外相本野一郎らの進めようとする全面出兵論については、日清・日露戦争のときとちがって「冷静な」国民の同意を得られないこと、および列国の猜疑心を煽り、「日本の今後の国際的地位は益々困難を極むることになる」ことを理由に、反対論を唱えた。<sup>⑧</sup>これは、吉野作造<sup>⑨</sup>、そして臨時外交調査会の人かで原敬や牧野伸顯らのとった態度と近似しており、要するに、アメリカを中心とする国際的秩序のもとでどうすることが日本にとって得策かという観点によっていた。本来大山が排斥すべきはずの「功利主義」が、外交政策においては貫徹していたのである。<sup>⑩</sup>

一方国内では、一九一八年八月、全国に及ぶ米騒動が発生する。大山はやはりのちに、「米騒動の時の大阪、京都の市街戦のような騒ぎには、深入りしすぎて生命を落とすところだった」と<sup>⑪</sup>、渦中に身をおいての記者としての奮闘ぶりを回想している。

その結果大山が得た米騒動像は、官僚政治の失敗がもたらした当然の帰結としてのそれであった。政治行動に倫理性を求める大山からすれば、米騒動は本来、けっして首肯しうるものではなかった。大山は次のように述べている。

「我等は、今回の米騒動の背後に於て、我国民性の一の特徴たる躁狂性が著しく活躍したことを忘れてはならぬ。我国民の躁狂性は、常に彼等の団体的示威運動を化して群衆的暴動とならしむる危険の甚だ多きものである。（中略）

兎も角我國民が此欠点を多大に有して居ることは、從來屢ば市民大会などの各機會に於て的確に証明せられたものであつて、今回の米騒動は更に又その一新例を加えたものである。<sup>②</sup>

それゆゑ大山の米騒動についての論文「米騒動の社会的及び政治的考察」（前掲）では、「生命を落とす」ほどに接近して米騒動の取材を行ったという割には、騒動時の民衆の様子などが具体的に描かれていない。大山の関心は、「群衆的暴動」である米騒動に新たなデモクラシー發達の可能性を見いだすよりも、米騒動の誘因となつた寺内官僚内閣の失政を糾弾することにあつたのである。

したがつて大山は、「国民性の欠陥」を指摘してはいるものの、米騒動に立ち上がった民衆を難詰することはしなかつた。前に労働者の立場を擁護したのと同じ論法で、「彼等に立憲的に行動する權利を与へずして、只立憲的に行動する義務のみを課するは、国家的不道德と謂ふべきものである」と述べ、米騒動に立ち上がらざるをえなかつた民衆への一定の共感を示した。このような主張は、ほかに『万朝報』や『日本及日本人』にも見られるように、多くの論者に共通しており、また当時の他の民本主義者や新聞の社説等に比べて、とりたてて卓見であつたとはいえない。

しかし大山は、さらに続けてこうも述べる。

現行の選挙法は、選挙資格を与ふるに際して、人を見ずして唯財産のみを見て居るのである。故に選挙権を有せざる徒が、或る場合に於て人らしく行動せずして、猛獸らしく狂乱しても、唯之に対して法律上の制裁を加へ得るのみであつて、国家的道德上より之を責罰することが出来ないものである。斯くの如きは正に是れ、国家生活上の一大不備と謂はねばならぬ。故に我等は将来の社会的不安を除く手段の一としても公民教育の普及並に發達を

謀るべきことを主張し、而して公民教育の第一歩として選挙法の改正を絶叫せざるを得ないのである。<sup>⑤</sup>

ここに大山が米騒動をきっかけにして、「国家的道德」を保持する必要から普選の緊要性を再確認していく様が見てとれよう。大山によれば、道德は国家が一方的に民衆に要求するものであってはならず、国家の側もまた国民が「道德的」であるための保障を行っていなければならないのであり、当面まさに選挙権の拡張がなされねばならなかった。すでに見たようにこの大山の「道德」主義は、ともすれば民衆に対する抑圧に転じる危険性ももっていたが、この立場こそがその後も大山の民衆への接近を可能にしていくな鍵となるのである。その後の時期については、別に稿を改めて論じることとする。

## 注

① 大阪朝日新聞社社史編纂室記録。同室松尾英亮氏のご教示による。大山自身は、入社を「一九一七年十月頃だったと記憶している」と述べているが（『新聞記者時代』『寺内内閣の弾圧時代——危険顧みず渦中から論説取材——』・『新聞協会報』一九五二年八月一八日、誤りである）。

② 前掲「寺内内閣の弾圧時代」。なお、一九一八年四月段階での大山の月給は一五〇円であった。これは編集局では鳥居局長に次ぐ高給で、長谷川如是閑、丸山幹治、花田大五郎らもこれに及ばなかった。また、二〇〇円の臨時賞与を受けているが、二〇〇円以上を支給されたのは局内で一七名のみであった（大阪朝日新聞社社史編纂室記録。松尾英亮氏のご教示による）。留学経験や大学教授の経歴を買われて、好条件で迎えられたことがわかる。

③ 同上。

④ 「政界の近状と我国憲政の前途」『中央公論』一九一七年二月）一～二頁。

⑤ 「世論政治の将来」『新小説』一九一七年一月）二二頁。

- ⑥ 前掲「政党界の近状と我國憲政の前途」、一〇～一頁。
- ⑦ 同上、一一頁。
- ⑧ 同上、一五～六頁。
- ⑨ 同上。
- ⑩ 「政党的試練期」（『新小説』一九一六年一月）一二頁。戸陵隱客の筆名。
- ⑪ 「元老を謳歌せよ」（同上）六頁。戸陵隱客の筆名。
- ⑫ 「露国革命の教訓」（『新小説』一九一七年四月）一二～四頁。戸陵隱客の筆名。
- ⑬ 『原敬日記』一九一七年三月二日（福村書店版、第四卷、二七三頁）。
- ⑭ 「國論の統一と臨時外交調査会」（『新小説』一九一七年七月）、および「臨時外交調査委員會の政治的価値と之に対する加藤氏及び犬養氏の態度」（『中央公論』一九一七年七月）。
- ⑮ 「総選挙戦に参加して」（『新小説』一九一七年五月）五八頁。三宅雪嶺・尾崎行雄らも、金沢で永井の応援演説を行った（永井柳太郎伝記編集会『永井柳太郎』、一九五九年、勁草書房、一三六～七頁）。
- ⑯ 前掲「総選挙戦に参加して」、五九頁。
- ⑰ 同上、六四頁。
- ⑱ 前掲『永井柳太郎』、一三七頁。
- ⑲ 「岐路に立てる我國の憲政」（『大学評論』一九一七年四月）三九頁。
- ⑳ 吉野作造「世界の大王潮と其順応策及び対応策」（『中央公論』一九一九年一月、松尾尊允編『吉野作造集』一九七六年、筑摩書房）二一〇頁。
- ㉑ 大山は、この論文の末尾で次のように述べて、そのいらだちを表明している。「國際社会の觀念が著しく現実性を帯び來つた現代に於ては、何れの國家と雖も世界的時代精神を無視して安全で居ることがあり得ない。唯茲に一つ怪しむべきことは、我が遣外特使（石井子）や、大使（珍田子）が遠い外國に於てデモクラシーに共鳴する外交的演説をして居る間に、本國に於ける國民は依然として官僚政府を戴き、その宣誓的善政主義の余沢に均霑しつゝ嶮嶮して居ることである。我等はその間に何か海底電線と新聞紙との存在を忘却したる或る時代錯誤が行はれ居るのではないかとの疑惑を深めざるを得ないものである」

(前掲「デモクラシーの政治哲学的意義(その三)」、一九一七年二月、八六頁)。

22 前掲「デモクラシーの政治哲学的意義」(一九一七年七月) 六三〜四頁。

23 同上、六五頁。

24 同上、六九頁。

25 同上、六五頁。

26 前掲「デモクラシーの政治哲学的意義(其の二)」(一九一七年一〇月) 五九頁。

27 前掲「デモクラシーの政治哲学的意義、六八頁。

28 前掲「デモクラシーの政治哲学的意義(其の二)」、五九頁。

29 松本三之介「VI 政治と知識人」(橋川文三・松本編『近代日本政治思想史II』一九七〇年、有斐閣)一六八頁、および藤原保信『大山郁夫と大正デモクラシー』(一九八九年、みすず書房) 六四〜六頁。

30 前掲「デモクラシーの政治哲学的意義(其の二)」、六三頁。

31 同上、六六頁。

32 この部分は、「現代人の心理と国家思想」(『新日本』一九一七年一月)とほぼ同一の内容である。

33 前掲「デモクラシーの政治哲学的意義(其の三)」(一九一七年一月) 八五頁。

34 同上、八四頁。

35 同上、八二頁。

36 前掲「デモクラシーの政治哲学的意義」、五六〜六〇頁。

37 「国家生活と共同利害観念」(『新小説』一九一七年二月) 三七頁。

38 同上。

39 ところがその翌月に発表された「岐路に立てる我國の憲政」と題する論文(『大学評論』一九一七年三月)では、一転して力点は、立憲政治を支える「合理主義」の側に移動している。それは我國の政治界にはびこる元老・閥族・官僚の「非理主義」と対置させることによって強調されているのだが、他方、「非理主義を以て社会生活全体の結合の靱帯とすれば、合理主義は則ち個人格独立の主張の枢軸と見るべきものである」(同上、二六頁)との定義づけもなされており、読む側のとまどい

を禁じえない。大山の主張は究極、両者が「相抱合し調和せねばならぬ」（同上、二七頁）というところにあるながらも、やはり大山自身、そのジレンマゆえに動揺があったことを示しているよう。

④〇 河上肇『貧乏物語』（一九四七年、岩波文庫）一三三頁。

④① 同上、一二九頁。

④② 「現代公共生活の諸相」『新小説』一九一七年二月、一五頁。

④③ 同上、一四頁。

④④ 「政治思想の混沌時代」『中央公論』一九一七年一〇月、九頁。

④⑤ 同上。

④⑥ 「永田警保局長の近業を読む」『大学評論』一九一八年二月、三七頁。戸陵隠士の筆名。

④⑦ 前掲「現代公共生活の諸相」、一四頁。

④⑧ 河上前掲書、一二六頁。

④⑨ 「世界に於ける政治の民衆化的傾向及び其特徴的諸現象」『中外』一九一七年二月、三六頁。

⑤〇 前掲「国家生活と共同利害観念」、三九頁。

⑤① 鳩蛇評人「好紳士吉野君と大山君」、九三頁。

⑤② 室伏高信「思ひ浮ぶまゝに」、八六頁。

⑤③ 室伏「現代の政論家と大山郁夫（現代新人評論）」『新小説』一九一八年一月、八二頁。

⑤④ 前掲「思ひ浮ぶまゝに」、八七頁。

⑤⑤ 北吟吉「吉野博士と大山君」（前掲「政治学者としての吉野博士と大山氏」）八八～九頁。

⑤⑥ 前掲「現代公共生活の諸相」、一三頁。

⑤⑦ 大杉栄「飛行術的言論家」『文明批評』一九一八年二月、大沢正道他編『大杉栄全集』第二卷、一九六四年、現代思潮社、二一四～八頁。

⑤⑧ 同書は一四編の論文からなるが、そのうち大山批判を中心においているものは、「沙上のデモクラシー——大山郁夫氏の民本主義を評す——」、「ロンビンソン・クルウソーの政治哲学」、「現実を離れた『理想政治』」、「民本主義の機会均等論」（以

上、初版)、「民を本とせざる民本主義」、「賢哲の思想と衆愚の生活」(以上、増補六版に追加)である。

59 前掲「賢哲の思想と衆愚の生活」『山川均全集』第二卷、一九六六年、勁草書房)八一頁。

60 前掲「ロビンソン・クルウソーの哲学」(同上書)一四頁。

61 同上、一八〇九頁。

62 同上、二五頁。

63 同上。

64 荒畑寒村「山川均論」『改造』一九三一年一月、「単行書解題」・『山川均全集』第二卷)四一七頁。

65 「憲政三十年の獲物」『中央公論』一九一八年三月)九九頁。

66 ここにも明らかなように、大山はしばしば、ドイツ留学中に学んだオッペンハイマーやグンプロヴィッツの群論争説の用語を使っているが、この段階では、現状の「優」「劣」の「統治関係」を説明するために用いたにすぎず、それを否定して「倫理関係に引き直はす」ことにこそ真意があったのである。

67 「国際生活上の新紀元と日本の政治的将来」『中央公論』一九一九年一月)一三八頁。

68 「世界の大勢と国民思想統一問題」『大学評論』一九一九年一月、二三頁。

69 前掲「国際生活上の新紀元と日本の政治的将来」、一三九頁。

70 「露国過激派の実勢力に対する過小視と其政治思想の価値に対する過大視」『中央公論』一九一八年五月)一一頁。

71 同上、九一〇項。

72 同上、一三頁。

73 吉野作造「民本主義・社会主義・過激主義」吉野『社会改造運動に於ける新人の使命』一九二〇年、文化生活研究会出版部)一八〇〜一頁。

74 同上、二七五頁。

75 前掲「過激派の実勢力に対する過小視と其政治思想の価値に対する過大視」、五頁。

76 前掲「国際政治上の新紀元と日本の政治的将来」、一三三頁。

77 「米国の対露政策の成功」『中央公論』一九一八年五月)。

大山郁夫研究(福井)

⑦⑧ 「出兵の経過を顧みて日米の対露外交を批判す」（『大学評論』一九一八年九月）一八頁。

⑦⑨ 詳しくは、松尾前掲「解説」、四七一―二頁を参照。

⑧⑩ 大山は、後年、「私が書いたシベリヤ出兵の論説ではとうとう朝日を発禁にしていまい、当時、二万円の損害を与えたといわれた」と回顧している（前掲「寺内内閣の弾圧時代」）。大山自身は、「寺内は必要以上の軍隊をシベリヤに送り、シベリヤに日本軍の基地を着々と築いていた。この間の消息を朝日の一青年記者がシベリヤから通信で送ってきた。その通信にもとづいて私が日本軍の侵略意図をバクロした論説を書いたのだった」と述べて、もっぱら出兵に反対したことを強調しているが（『新聞記者時代』）「シベリヤ出兵」論説で発禁処分——支那浪人に裸にされた村山龍平氏——・『新聞協会報』一九五二年八月一八日）、それは「必要以上」の軍隊であった点に反対したのであり、出兵を全面的に否定するものではなかったと思われる。しかしそれも、全面出兵を推進しようとする寺内内閣からすれば、それを妨害する「危険思想」にちがいはなかった。

⑪ 前掲「寺内内閣の弾圧時代」。

⑫ 「米騒動の社会的及び政治的考察」（『中央公論』一九一八年九月）九一頁。

⑬ 同上、九一頁。

⑭ 井上清・渡部徹編『米騒動の研究』第五卷（一九六二年、有斐閣）二三七―八頁を参照。

⑮ 前掲「米騒動の社会的及び政治的考察」、九一―二頁。